一章

姿見を覗き込み、今日のため選んだリップを塗って、メリーは胸を高鳴らせる。
いつもよりずっと丁寧に支度していた。人と会うのだから、身だしなみに気を遣うのは当然だった――蓮子ではない。彼女相手ならいつもの服で十分だ。とても大切で、素敵な人だった。
インターホンの音に、あわててモニタへ向かう。ぱたぱた鳴るスリッパの音は、どこか弾んで聞こえた。
「こんにちはメリーちゃん。遅れてごめんね」
「いえそんな、わざわざうちまで迎えにきてくださって、ありがとうございます」
玄関カメラに映るのは、心許ない毛髪の目立つ、冴えない中年だ。約束の相手だった。顔は弛んでいて、たらこ唇がムチムチしている。顎肉が余っているせいで、首が見えない。ワイシャツの襟元を緩めて、ぱたぱたと扇いでいた。
「それじゃあ、そちらに向かいますね。車は駐車場ですか?」
「うん。そっちで待ってるよ。いつもの奴だから」
「はあい。それじゃ下でお会いしましょう」
カメラを切る。口元には笑みが浮かんでいた。これから待つ素敵な時間を思うだけで、蕩けてしまいそうだった。

スーツケースとハンドバッグを手に、部屋を出る。エレベーターを待ち、駐車場のある地下まで降りる時間さえも待ち遠しかった。扉が開くなり、彼のミニバンを視線で探す。

「やあ、メリーちゃん」

「あはっ」

呼びかけられて輝いた顔は、さながら恋する少女だった。

相手は、女子大生の恋愛対象としてはあまりに不相応な外見をしていた。メリーと同じくらいの上背なので。男性としてはかなり小さい部類に入る。しかも胴長短足なせいで、ファンタジー作品に出てくるゴブリンか何かを思わせる。腹のたっぷりと突き出す様など、まさにといった感じだ。

「今日はなんだかいちだんと綺麗だねぇ。見蕩れちゃうよ」

「だって、せっかくおじさまと会うんですもの。気合い入れちゃった」

「荷物はそれだけかな？　貸してくれるかな、積んじゃうから」

スーツケースを預ける。低身長とはいえ流石に男性だった。軽々と積み込む。

おじさまと親しく呼ばれるこの男が何者かといえば、メリーが通う日本語教室の講師だ。最初は健全な関係だったが、いつの間にやら下半身で繋がりあう仲――セックスフレンドとなった。

といっても、最初から受け入れていたわけではない。最初などは完全にレイプだった。嫌だったし、抵抗して泣き叫びもした。

ただし、受け入れるまでにそれほど時間はかからなかった。彼から与えられる快感は、問答無用で屈服させられ、強姦を後出しで和姦にしてしまうほど素晴らしかったから。

猛々しく反り返ったペニスでほじくられるたび、嫌悪感は塗り潰されていった。中年男特有のいやらしい腰使いで、弱いところを責め立てられて、オンナの本性を開拓された。肉穴の奥底に性の悦びを刻みつけられ、メリーはすっかり彼の虜だ。

「よし、こんなもんかね」

ゴールデンウィークに、温泉にでも行かないかい？

一ヶ月ほど前、ホテルでの行為の最中に誘われた。普通の旅行ではない。彼との逢瀬はセックスとイコールなわけで、一緒に出かけるとなればセックス漬けの日々になる。

快楽の徒となったメリーに否やはなかったが、即答はしかねた。サークルとの兼ね合いが悩み所だった。連休をフルに使うとなれば、秘封倶楽部の方は完全に休みになる。

躊躇いを打ち消したのは、おじさまの繰り出す力強いピストンだった。言うことを聞けとばかりに、膣奥を執拗に突かれては、女に同意する以外の道などない。首を縦に振ったのは、子宮口を三度ノックされたときだ。

以来、今日をずっと楽しみに過ごしてきた。昨晩はなかなか寝付けなかったほどだ。
「ああそうだ、忘れるところだった……んぢゅるッ」
「んむぅっ。んちゅるぅっ、んむぅ、んふっ、んむちゅぅ」
思い出したと呟いた次の瞬間、男はメリーの唇を奪った。たらこ唇が、麗しきリップを貪る。むちゅッ、むちゅっと、粘膜を触れあわせるネットリした音が響く。
いきなりの接吻を、彼女は拒まなかった。むしろ自ら舌を絡ませ、熱烈なディープキスを交わす。
おじさまのの口腔からはヤニの香りがした。いつもの銘柄だ。知り合いは誰も吸わないので、初めは少し苦手だった。今では、脳内で彼と紐付いている。嗅いだだけでスイッチが入ってしまうほどに。
「んぷぅ……。もう、こんな処で。誰が見てるかも分からないのに」
「構わないだろう？　メリーちゃん、そういうの好きじゃないか」
やがて口を離せば、二人の間を唾液の糸が伝う。いきなりは困るわと口を尖らせるが、おじさまは気にも留めない。実際、メリーにも、本気で咎めるつもりは全くなかった。
「さ、行こうか」
促され、助手席の扉を開ける。染みついたヤニの香りが鼻孔をくすぐる。乗り込もうと

すると止められた。紙袋を渡される。
「せっかくおめかししてもらったところ悪いんだけど、ちょっと着替えてくれるかな？」
「え、ええ？」
袋の中身は衣類らしかった。せっかくお洒落したのにと、肩を落とす。
それでも、断りはしない。彼の思いつきは、メリーを深く悦ばせてくれる。気持ちよくしてもらえるなら、なんだって受け入れるのが今の彼女だ。
「いいだろう？　なぁに、悪いようにはしないからさぁ」
「あんっ……」
おじさまの手が腰に回る。ウインナーを思わせる指が、西欧人特有のむっちりした尻を、白昼堂々撫で回してくる。
「やぁん、あっ……」
こんな風にされたら拒めない。肉棒の快楽とともに膣奥へ刻まれた屈服が、拒否の選択肢を奪っていく。まったく悪い男だった。
「はあ……んっ。もう、わかりました」
後部ドアから乗り込んで、サンシェードを下ろす。七人乗りのバンなので、全て座席を倒せば着替える程度の空間はできた。

衣服に手をかけ、肌を晒していく。男は運転席から降りようとしない。乙女の更衣を、ストリップショー感覚で愉しむつもりなのだろう。

裸なら何度も見せたし、カラダの隅々まで知り合っている仲だ。今さら、見るなと狭量なことを言うつもりはなかった。

ぱっちりした二重目蓋と深い紫の瞳。通った鼻筋に、ぷっくりと瑞々しい唇。メリーはもともと、ずばぬけて顔が整っていた。二十歳を超えてからは、急速に女らしい美を獲得しつつあった。キャンパスを歩けば振り返る男子は多いし、スカウトされたりもした。

彼と関係を持って以来、艶やかさをも纏っている。豊かに肉を蓄えつつ、締まるところは締まった、西洋ならではのグラマラスボディだ。白い肌に象られた輪郭は実にメリハリがきいて、男好きのするものになっていた。

首には胸鎖乳突筋がうっすら浮かび、色香を漂わせている。鎖骨は優雅に左右へと伸び、さながら翼のようだ。肩の稜線と緩やかに合流する様はなんとも雅だった。

レースブラに覆われた巨乳、いや爆乳は、掌に余るほどのサイズだ。ぷるんとたわわな豊山は、ずっしりした重量と柔らかさを一目で伝えてくる。マシュマロのような、という表現がぴったりだ。

背中に手を回し、ホックを外す。途端、ぷるんっ！　と乳房が暴れ出て弾み、男の目を

楽しませた。

放埒なるバストはなんとJカップだ。日本人ではほとんど見ないサイズであり、異国の血を感じさせる。左右の肉が形作る谷間は深く、指を差し込みたくなる魔性を放っていた。

当然かなり重く、片方だけで一五〇〇グラムにもなる。垂れてしまいそうなものだが、クーパー靱帯によってしっかりと支えられている。前方に突き出した釣鐘型だ。俗にいうロケットおっぱいだ。

肌は透き通って、皮膚下を通る静脈の青をうかがわせている。あらゆる男が涎を垂らし、あらゆる女がハンカチを噛みしめて嫉妬する、際立った美乳だった。

西欧出身ゆえ乳輪は広い。肌色をやや濃くした薄褐色が魅力的だ。先端の突起を、男はじろじろと眺める。見つめられるほどに充血して、ぷっくり尖っていく。

腹回りのくびれは、身体全体におけるエロスの出所となっている。ウェストラインは、砂時計型にくびれつつ脂肪を蓄えている。前者だけであれば不自然に見えて不気味だったろうし、後者だけならば肥えて見えたろう。矛盾した要素を、見事に成立させている。

臍は縦に走って、身体全体におけるアクセントとなっている。セックスアピールを二倍にも三倍にも増幅させていた。

豊かに広がる骨盤のおかげで、腰回りはむっちりと広がっている。はっきりと「女」を

感じさせる部位であり、雄に強烈な欲望を抱かせる。
ほんの一年前は、ここまでセクシャルではなかった。彼と肉体関係をもち、雄を何度も味わったがゆえの変化だろう。男を悦ばせる、セックスのためのボディに変わりつつあるのだ。おかげで、太った？　などと蓮子に訊かれたりもしたが。
レースショーツに覆われて、色香はむせ返るほどだ。男も、今まで何度も見てきたろうに、くわっと見開いた目を血走らせている。
見せつけるように、サイドへ指をかける。ゆっくり下ろせば、薄布は肌から離れていく。貞操の守護者は喪われ、秘めやかなる部位が露わになる。
人種ゆえか陰毛は濃く、形こそ整えられているもののふさふさと多い茂っている。髪色をやや濃くした、照り映えるような金色だ。さながらマリーゴールドを敷き詰めた庭園だ。
そのすぐ下、子を成すための裂け目は、花開いてオンナの香りをむわりと漂わせている。中年のペニスを幾度となく受け入れ、彼好みにいやらしく調教された穴だ。花弁はどうぞいらっしゃいとばかりに咲き誇り、男を惹きつけてやまない。
「何度見てもいやらしいエロマンコだね。しかもどれだけハメても、グロくなるどころか、どんどんいやらしくなっていって。奇跡みたいな身体だよ」
「やん、もう」

両腿の間に顔を埋めてくる。鼻息がかかるほど近くで凝視してくる。
軽く押しのけやめさせる。嫌だったわけではない。むしろ逆で、あまり見つめられると濡れてしまいそうだったからだ。求められればいくらだっていやらしいオンナになるが、羞恥心を忘れたわけではなかった。
「こりゃ失礼。ついでにお尻も見せてくれるかな？　ああ、脚も見たいな」
「ん……ほら、これでいい？」
倒した座席の上で四つん這いになり、臀部を彼に向ける。
ヒップはむっちりと肉を載せている。ゆったりしたフレアスカートの上からでも分かるほどであり、生となればなおさらだ。コーカソイドならではの、発達した大臀筋によって支えられて、完全な球形ではと思うほど美しいラインを描いている。日本人だったなら、間違いなく垂れていただろう。
「むしゃぶりつきたくなるようなケツっていうのは、こういうのを言うんだよなぁ」
「あん、ちょっと、もうっ」
先ほど拒まれた意趣返しとばかりに、尻肉を揉んでくる。もっちもっちと、脂肪は弾力と柔軟性を備えた魅惑の感触で男を愉しませる。離れてよと身をよじる様は、誘っているふうにも見えた。

「それにこのドスケベオマンコ。とんでもないな」
剥き出しの肉貝を指で左右に開いてくる。幾度と彼を受け入れたコーラルピンクの粘膜は、空気に突然触れたことで、ヒクッヒクッと蠕動する。
「脚も凄いよなぁ、この肉付きときたら！」
レッグラインのむちむち具合ときたら、皮付きの鶏ももを連想させる。白さもちょうど似通っている。我が物のごとく撫で回し、滑らかな肌の感触を愉しんでいる。内腿を這う指がもたらす、ぞわぞわと鳥肌のたつような感覚に酔いしれる。
「いやぁ、この身体がアレを着たら、どんなことになるかな。いやもう、今すぐ見たくてたまらないな。着てくれるかな？」
先ほど渡してきた紙袋を顎でしゃくる。一体何を用意したのか。訝りながら、中の衣装を取り出した。
「え？　ん？　これ……えっと。あー、ああ。なるほど、そういう？」
ブラもショーツも毎日着けているが、今回ばかりはだいぶ戸惑った。なにせ、あるべきところに布が無かったために。あらかじめ言われていなければ、下着だとも思わなかったかもしれない。
ともかく、着る。ランジェリーは、真っ暗闇でも目立ちそうな、派手派手しいマゼンタ

レッドをしている。肌の白さと、絶妙なコントラストをなしていた。
ブラには、本来ならバストを覆うはずの布がない。いわゆるカップレスブラだ。
アンダーベルトが支えることで、ただでさえたわわな乳房が、際立った破壊力を得る。
匂い立つほどのセックスアピールは、いっそ暴力的ですらあった。
ショーツも随分な代物だった。レースがかなり薄く、肌を透けさせている。食い込むGストリングが、ヒップを覆うどころか剥き出しにしつつ強調する。
あげく、クロッチに布がない。オープンクロッチだ。一番大事で、隠されるべきであるはずの裂け目が、思いっきり曝け出されていた。
普段使いする品ではない。閨に持ち出すにも大胆というか、あからさますぎた。下品な印象すら与えかねない一品だ。
ところがメリーの場合、肉体の美しさが全ての問題を解決していた。惚けるほどの美がいやらしく飾り立てられたことで、見る者を容赦なく勃起させる退廃感を獲得していた。つまり、スペックでゴリ押しだ。
「いやはや……思った以上だ。こりゃすごい。いや、本当に」
目の前の淫猥を表現する言葉が、思いつかないらしい。本当にすごいと繰り返しながら、男は眼前の女体を強い視線で見つめる。

スラックスに、あからさまなほどテントが張っている。このカラダを自由にできる立場だと思えば、そうなるのもむべなるかなという話だ。

「ほら、まだあるだろう？　それも着てくれるかな」

当然、ランジェリーだけで終わりではなかった。上着もちゃんと入っている。テレビやネットでしか見たことのないような衣装が、だ。

「……なんていうか、こういうのってまだあるのね？」

「私が社会人になったぐらいに流行ってたファッションだね……でもまだあるよ、一応」

本当かなと疑いつつも、なんだかんだで身に纏っていく。ディープパープルがてらてら輝く、エナメル製のボディコンだった。

ボディラインの表現を起源とするファッションなので、全体の傾向として露出が多い。なかでも、これは極めつけだった。

首元をストラップで止めるワンピースタイプだ。胸元はまるで隠れていない。深い谷間が曝け出され、男を惑わせる。ウェストに空けられた穴により、麗しい臍が強調される。

サイドからバックに至っては、そもそも生地がほとんど無い。紐をリングで繋ぐ形で、白く麗しい背中を大胆に曝け出す。仙骨あたりからは一応布もあったが、ヒップラインにぴっちりと沿って、臀部の輪郭を浮かばせている。

丈も実に短く、膝上三〇センチを超えるウルトラミニだ。太腿のほとんどを露出させている。立っていても尻の肉が若干姿をうかがわせている。座ったりすれば、あらぬところまで見えてしまうだろう。

「うん。本当によくお似合いだ。通販サイトで見かけた瞬間、メリーちゃんにピッタリだと思ったんだよね」

己の目は正しかったと、男は深く頷いている。好色な視線が肌のあちこちに向けられている。羞恥に、肌が赤らむ。何度も素肌を晒しあった仲とはいえ、素っ裸を見せるよりもむしろ恥ずかしくすら感じられた。

「ちょっと、何撮ってるんですか」

「そりゃそうだろう？　眺めてるだけじゃ勿体ないし、これも旅行の思い出だよ。ほら、ポーズポーズ」

ポケットからスマホを取り出し、ピロピロとシャッターを鳴らす。

痴態を記録されている。後でどう使われるか、分かったものではない。だというのに、メリーが覚えるのは嫌悪ではない。露出の快楽だ。

「いやらしいカラダだと思ってたけど、こりゃ極めつけだ。どエロいオンナだよ、本当」

ぼそぼそ呟きながら、乳房の谷間や肉への食い込みを激写している。否応なしに、己の

卑猥さを自覚させられる。知らず知らず、身体が熱を帯び始める。
「ほら、股を広げて」
言われるまま、座席に腰をついて、大きく脚を放り出す。股下数センチのドレスゆえ、鼠径部が剥き出しになる。オープンクロッチのショーツでは隠蔽の役になど立たず、恥丘が思い切り曝け出された。
レンズが触れそうなほどの距離で、膣肉を接写される。物理的な接触などないはずだというのに、直に触れられているかのように感じられた。
「うん、のっけから素晴らしい旅の思い出が出来たね……じゃあそろそろ出発しようか」
「はぁい」
応答の声は、鼻がかって甘くなっていた。旅程は一週間。どれほど素敵な時間となるか、考えただけで濡れてしまいそうだ。
いったん降りて、助手席に座り直す。シートベルトが乳に食い込む様を、男は目を細め眺めている。両膝をぴったりと合わす。このドレスは丈が短すぎて、あらぬところが簡単に見えてしまう。
「よし、出発だ」
駐車場から出る。差し込む日差しが目を刺した。サンバイザーを下ろす。

目的地は隣県の温泉街だ。女子大生の行楽地には渋すぎる気もするが、メリーに否やはなかった。なにせ観光が目的ではない。浴衣姿で組んずほぐれつというのも悪くなかった。湯に美肌効果でもあればなおよしだ。

「ん、もう……」

信号待ちになるとすぐ、おじさまの手がハンドルから離れた。カーナビでも弄るのかと思いきや、太腿に触れてくる。むっちりすべすべの感触を愉しんでいる。

もう、などと言いつつも、払いのけはしない。拒まれないのをよいことに、男は行為をエスカレートさせる。

指が内腿に入り込む。内転筋と脂肪が織りなす手触りを堪能する。ぞくぞくこみ上げてくる官能と期待に、甘い声を漏らす。

当然、そこで終わりはしなかった。指は鼠径部に至る。パンティを穿いていながらも、全く隠されていない恥部を、指の腹が擦り上げてくる。

「はっ、あ、んっ、はぁ、あん……」

地方ラジオのトーク番組に混じり、情熱的な吐息が車内を満たす。官能は淡くも確実にメリーを確実に昂ぶらせる。腹の奥が、じくじくと疼いている。

出発当初は閉ざされていた膝は、いつの間にか大きく、品がないほど開かれる。座り方

としては不自然なほど深く腰かけ、下半身を前方に突き出している。どうぞもっと触ってくださいといわんばかりだった。

「あっ、は、おじさま……ンッ」

尺取虫のごとき動きで、入口を弄んでくる。切なさから鼻がかった声を漏らし、悦びに酔いしれる。

車のエンジン音に混じり、ぬちっぬちっと猥褻な音が聞こえてくる。奥から溢れた愛蜜がこねられているのだ。

「おやおやもう濡らして、相変わらずいやらしいオンナだなぁ」

「んっ、は。誰のせいだと思ってるの……」

「もちろんメリーちゃん自身のせいだよ。僕は本性を暴いてやっただけだからねぇ」

いけしゃあしゃあと言ってのける。反論しようにも、濡れた牝肉をこねられながらでは、なんの説得力もなかった。

「さて、せっかく良くしてあげてるんだ。おじさんのも頼むよ」

「あぁあんッ……！」

バックミラーを介して、ニタニタとみだりがましい目を向けてくる。

頼むよと口では言うが、実質的に命令だ。女にとって最大の弱点を擦られている以上、

抗えるわけがない。まして、ぴぃんと尖り始めた陰核を指先で転がされたりした日には、頷く以外の選択肢などなくなってしまう。

手を、彼の股座へと伸ばす。スラックスには露骨すぎるくらいのテントが浮かんでいた。

「あぁ……」

思わず、溜息が漏れる。コレに、何度もオンナにしていただいたのだ。見ているだけで、甘美なる記憶が思い起こされた。

ホックを外し、ジッパーを下ろす。ボクサーをずらせば、ソレがバネのごとく勢いよく飛び出た。

中年男ならではの、えげつない竿だった。メリーの顔よりも長く、親指と中指でつくる輪っかより太い。弧を描いて反り立つフォルムは、凶悪の一言だ。

どどめ色の亀頭が、肉厚な椎茸よろしく大きく張り出している。淫水焼けした薄黒い幹には、血管がぐねぐねと這い回っている。くろぐろと生い茂る陰毛の根元には金玉が鎮座し、大量の精子を急ピッチで製造していた。

見ているだけで、息を飲むほどの業物だ。無論、単なる排泄器官としてみるなら、無駄極まりない。これはまさに、女を屈服させ、己のための情婦へと堕とす凶器だ。

何人の女性が泣かされ――いや、鳴かされてきたのだろう。メリーも、被害者のうちの

一人だった。暴力や盗み、詐欺と違い、被害を受けてもむしろ嬉しくすらあったが。

「あぁ……」

女子大生の白く長く美しい指が、愛しいおじさまのモノに絡められる。手は体においてもっとも触覚が発達した部位だ。そんなところで雄の性器に触れるのだから、伝わる熱は想像以上だ。触っているだけで、子宮を絡め取られてしまいそうだった。

しかも、今からもっと大胆なことをするのだ。ゆっくりと、手首のスナップをきかせて扱きはじめる。

「はぁ、んっ、あぁ……」

ゆっくりと上下に動かすたび、ペニスの形を思い知らされる。独特のカーブは、膣穴をほじくりながら、よいところを徹底的に擦り抜くためのものだ。生殖のための神聖な器官を、快楽を貪る卑猥穴にせしめるため、磨き上げられていた。

呼吸が浅くなっている。はっ、はっと、熱く甘い吐息を雌犬よろしくこぼす。発情しているのは、頬の紅潮具合からも明らかだ。これでは、どちらが奉仕する側だか分からない。

「むっ、おっ、ムオオ……」

とはいえ彼も、きっちり感じていた。自らの手で仕込んだ女子大生の技術は、中年好みのねっとりとしたものだ。小さく唸りながら、堪えるように眉根を寄せる。掌の内で肉棒

がムクムクといっそう膨れるのを、メリーははっきりと感じていた。
もちろん、竿ばかり扱いて終わりではなかった。根元でぱんぱんに膨れている玉袋をも、撫で回しはじめる。コリコリした睾丸を、指先でそっと転がす。袋をめくり上げて、会陰側からつつつ、となぞりマッサージする。
金玉というのは、男性の肉体における究極の急所だ。取扱には細心の注意が必要だし、愛撫するとなれば確かな技術が必要となる。その点、メリーの手つきは素晴らしかった。おじさま直々に、入念に仕込まれた技巧でもって、竿と併せて愛撫し、射精欲を煽り立てる。
一流のソープ嬢でも、これほどのテクはなかなか持ち合わせていまい。まして金髪美人にしてもらっているのだから、彼が興奮するのは当然といえた。
「んっ、はぁ……あぁ……」
興奮しているのは、彼だけではない。メリーもまた、えも言われぬ昂ぶりのなかにある。掌から伝わる肉棒の熱さは、ソレに与えられてきた快楽を否応なしに思い起こさせる。いわばパブロフの犬だ。それもとびきり卑猥な牝犬だった。
「ねえ、おじさま……」
媚びた声で囁く。唇を尖らせてアピールする。今日のために下ろしてきた口紅が輝く、ぷるりとしたリップは、運転中であろうと男の視線を吸い寄せる。

「ああ、もちろんいいとも。いやらしいメリーちゃんのことだから、どうせ我慢できなくなると思ったよ」

言って、おじさまは運転席に深く腰掛けなおす。両膝を大きく開いた。運転時の姿勢としては、あまりよくない。教習所なら間違いなく指導を受けるだろう。とはいえ、今から何をするか考えれば、これ以上なく適切といえた。

開かれた両脚、おじさまの股座へメリーは顔を埋める。鼻腔を、中年男特有の脂っぽい体臭がくすぐる。胸がときめいた。

「んちゅぅっ」

いきり立つ男根は、見ているだけで劣情を昂ぶらせていく。カウパーを滲ませる先端に、接吻する。熱烈なキッスにりて、唇はムニュンと形を変える。これは私のモノとばかりに、口紅の痕が残された。

「んはぁ、あむぅん」

大口を開け、魔羅を口内に迎え入れる。途端、口内に濃厚な中年臭が満ちた。本来なら不快でしかないはずの、他者の排泄器の香りに、メリーは瞳を蕩かせる。きゅぅんッ、と疼いた腹の奥に、思わず腰をモジつかせた。

「んぢゅぷッ、ぢゅる、んふぅ、んぽっ、んむむぅ」

すぐさま、頭を動かして肉棒をしゃぶりたてる。頬を窄め、むちむちとしたリップで圧をかけながら、茎を扱く。くぽっ、ぬぽっと、車内に卑猥音が響く。

唾液をたっぷり纏った舌先で、亀頭やカリ首を舐め回す。ほんのり苦みを帯びた先走りの味が、官能を刺激する。

「んふぅう……」

車内という、密閉されつつも外から丸見えの空間で、こっそりと行われる濃厚な性奉仕。アブノーマルな行為によって、普段以上に燃え上がる。

フェラチオは熱烈を極めていた。女子大生の口腔をいっぱいに使って、中年雄茎を扱く。根元付近に、口紅の痕が残される。ここまでしゃぶりましたという、何より分かりやすい証拠だ。さながら喫水線だった。

「んっ、ふ、んむぅう」

乳房をもちもちと揉みしだかれる。衣服を纏っているとはいえ、ほぼノーブラ同然だ。柔らかに形を変える肉塊は、男の触覚を悦ばせながら、彼女自身にも性快楽をもたらす。

「くむぅ！　んふッ、んっ、ふぅ、んっ、く、んぅう」

手は下へと向かい、肉貝を責め立てる。すでに濡れそぼった淫膣は、大した苦もなしに異物を受け入れる。ぬチュッ、ヌチュッと、猥褻音が鳴り響く。脳味噌にぴりぴりと響く

快感が走るたび、たっぷりした腰が悩ましげにくねっていた。
不意に、車が徐行程度まで速度を落とす。赤信号というわけでもなさそうだった。運転席側の窓が開かれる。一体何をと思っていると、割れた音声が聞こえてきた。
『いらっしゃいませ、ご注文をどうぞ』
「ンッ⁉」
驚きのあまりむせそうになる。いつの間にか、ドライブスルーに入っていたらしい。
口を離そうとするが、頭を押さえられた。そのまま続けたまえと、小声で囁かれる。
「ハンバーガーのセットと、アイスコーヒーのMを単品で一つ。以上で」
『かしこまりました。そのままお進みください』
「ち、ちょっとっ」
さも何事もないかのようにオーダーを出し、男はアクセルを踏む。慌てて姿を整えようとするが、彼は意にも介さなかった。
「何を慌てているんだい？　見せてやればいいじゃないか」
「え、ええ？　そんなこと……あぁッ！」
肉穴に入り込んだ指が、腹側のよいところを擦る。逢瀬を重ねる中で開発され尽くした女穴の、最大の弱点をだ。

そんな風にされたら、オンナの本能が疼いてしまう。なんだって、言うことを聞きたくなってしまう。

「別に構わないだろう。ねぇ？」

「あはっ、はぁ、ッ……わかりましたぁ……ッ」

熱に浮かされた声で、返事をしてしまう。再び彼の股座に顔を埋め、熱烈なフェラチオを始める。ぬぽッ、ぐぽっと猥褻音を響かせるうちに、車は受け取り口へ到着する。

「大変お待たせいたしました、ハンバーガーのセットとアイスコーヒーのM……エッ!?」

「んぅうッ……！」

男性クルーの裏返った声が聞こえる。そりゃそうだろう。いつもどおり働いていたら、性行為の真っ最中なカップルが来たのだから。しかもその片方が、とびきりの金髪美人となれば、なおさらだ。

「んっ、ふ、んぅ、ンッ……」

接客マニュアルの内容も忘れて、青年は固まっていた。沈黙が場を支配する中で、男が淫裂をほじる、ヌチュッヌチュッという卑猥音だけが響いている。艶めかしい官能の溜息が重なっていた。

「そら、せっかくだ。顔を見せてやりなよ」

「んふぅ……んぽぉっ」
言われ、口を離す。顔を上げ、クルーと視線を合わせた。
「うぉお……」
彼の瞳に映った己は、蕩けきった雌の表情をしていた。本来なら寝室でだけ許される、決して外で見せてはならない、猥りがましい顔だ。
真っ昼間、仕事中にそんなものを見せつけられた青年は、ある意味気の毒だ。シフトが終わるまで、思い出し勃起と戦い続けねばならないのだから。
「あんッ！　は、あぁ、駄目ェ……」
おじさまが指を蠢かし、肉襞をヌルヌルと虐めてくる。媚びた卑猥声は、とんでもない破壊力を秘めていた。
「さぁて、そろそろいいだろう。では」
五千円札を押しつけ、紙袋をひったくると、釣り銭も受け取らず車を出す。
出発しても、しばらくメリーは惚けていた。誰からも秘められるべき卑猥行為を他者に見られる経験は、女子大生を忘我させるに十分なほど鮮烈だった。
「いやぁ、良かったよメリーちゃん。見たかい彼の顔！」
「んッ、は、あぁッ、ひどいです、あんなコト……は、あっ、あ、んぅうッ」

イタズラ大成功とばかりにおじさまは笑い、頬肉をたわませる。抗議しようとするも、涎をあふれさせてやまぬ淫乱穴をくちゅくちゅとほじられては、まともに言葉を紡げない。

「ひどいって？　心外だな。僕は彼にズリネタを提供してあげたんだよ。どんなＡＶよりずっと刺激的な、変態女子大生の淫乱顔をね。きっと彼、今夜にでも、君の顔を思い出しながらオナニーするんだろうさ。感謝されこそすれ、責められるいわれはないよ」

「あぁッ……」

思わず、想像する。名も知らぬ青年が、己の痴態を思い浮かべては肉棒を扱く様を。

普通なら、嫌悪してしかるべきなのだろう。が、今のメリーは、それを素敵だと感じていた。雌穴を弄ばれる甘美な感覚が、どう考えても異常な事態に対し、負の感情を抱かせなかったのだ。

「はっ、あ、んぅッ、あ、はぁ、あんッ……」

おじさまは容赦なく、彼女を責め立て続ける。しつこくねちっこく、それでいて決してアクメには至らせない。何人もの女を食い散らかしてきた中年男性にとって、女子大生の一匹を達させず嬲り続けるなど、まさに朝飯前だった。

官能の波が近づいて、期待を抱いた瞬間、指は動きを止めてしまう。己の内側からこみ上げる官能に乱されながら、身を悶えさせる。

「おッ、お願いします。虐めないでぇ、はやくイかせてぇッ……」
「ふむ。ちゃんとおねだりできて偉いねぇ」
二、三度焦らされるだけで済むかと思っていた。が、おじさまは一般道を抜けて高速に入ってなお、焦らすのをやめない。
欲情の燃え上がることときたら、座席シートに愛液が滴りそうなほどだ。くねっくねっと悩ましげに動いて止まらない腰が、どれほど絶頂に飢えているか示していた。
「あぁっ、おまんこ、おまんこしてください、お願いしますぅ……ッ」
「とはいってもねぇ。今から下道に降りてラブホを探したりする時間はないよ」
「そんなっ、お願いですからぁ」
「仕方ないなぁ。じゃあ次のパーキングでシちゃおうか。ああでも、誰かに見られるか。さっきみたいなことが起きるかもねぇ」
「そんなの、そんなのどうでもいいから、はやくぅッ」
髪を振り乱し、半狂乱になってねだる。仕方ないなぁと、さもこちらが悪いかのように溜息をつきながら、男はハンドルを切る。
連休初日だけあって、パーキングエリアはそれなりに混み合っていた。隅の方に駐車し、エンジンを止める。

「サンシェードだけかけとこうか。まあ、フロントから覗かれたら意味ないけど」
「あはぁッ……」
座席が倒されると、簡易的なベッドとなる。サイドガラスの日よけも下ろされる。あっという間に、情交の用意が整えられた。
こんなに手早いなら、車とは案外、性行為に向いた乗り物かもしれない。色に狂った頭で考える。実際のところは大間違いだった。密室とはいえ外から覗けば丸見えで、防音性もなにもないのだから。
誰が見るとも分からない場所での、白昼堂々のカーセックス。下手すれば通報されかねないのだが、メリーは気にもしていなかった。見られたなら見られたで、先ほどのような昂ぶりを得られる。なにより、散々虐められた膣穴は、もう一秒たりとも我慢できないと言っていた。
「おじさま、来て、ここにおチンポ、ねじこんでェッ」
倒した座席に仰向けで寝転がり、はしたなく股を広げる。丈の極めて短いボディコンは、それだけで鼠径部を剥き出しにする。クロッチレスのショーツは、彼女の恥部を覆い隠すどころか、淫らに飾って強調してすらいた。
「うーん、こりゃァ凄いな。もう濡れ濡れだ。お漏らしでもしたみたいじゃないか。発情

した豚みたいだな、ははっ」
「あっ、は、あっ、あっ」
股の間に顔を挟んで、曝け出された陰唇を、鼻息がかかるほどの距離で見つめてくる。実際に触れられているかのようにねっとりとした視線は、彼女を確かに感じさせる。とはいえ、絶頂できるほどではない。昂ぶるばかりで果てない官能に、奥歯を噛みしめる。
「そぉら、メリーちゃんが欲しいのはこれだろう、ん？」
「ッは、あっ、はい、それ、それなの、それです、だから早く突っ込んで、ズボズボして、奥まで突いてイかせてぇえッ……！」
覆い被さられる。天井の低い車内ゆえ、ほとんど密着する形だ。ずっしりと、彼の体重がのしかかってくる。重いが、むしろ期待を抱いた。
股の間に、硬いモノが押し当てられる。彼女が望んでやまぬモノがだ。避妊具などない、生のペニスの熱は、それだけで達してしまえそうなほど素敵だった。
官能の溜息を漏らしながら、腰をくねらせ、ただひたすらにねだる。擦られた入口が、ぬちッ、ぬちっと音をたてた。
「もちろんいいよ、そら、よぉく味わえッ！」
「アッ、は、あぁあああああああああッ！」

中年男特有のたっぷりした腰が、勢いよく繰り出された。ぬぽんッ、と、泥の中に杭を打ち込むのに似た音が響いた。下腹と下腹が打ち付けられあって、打擲音を立てる。

一瞬遅れて、メリーの甲高い声が響く。誰に聴かれるか分からない状況であることなど、すっかり忘れたような大音声だ。

とはいえ、仕方ないことではある。与えられたのは、飢えきった雌穴を、逞しく反った雄で貫かれる悦びだ。嬌声を押さえるなど、鋼の精神をもってしても困難だったろう。

「はひっ、あっは、あぁッ、あはぁあ」

性感のあまりに、首筋がのけぞる。間抜けに舌が突き出される様は、とても酉京都大のエリート学生とは思えぬほどに無様だった。

「ほぉれ、ほれ。メリーちゃんのいいところはここだろう？　ン？」

「アッ！　はッ、ひぃッ、あぉッ、んぅうッ！　くはッ、ひぃ、あぉんっ！　んはぁ！」

体重の乗ったストロークが繰り出される。被せ物なしの雄々しき棒が、ゴリッゴリッと音を立て体内を抉る。

「はひぃッ、はぁッ、あぉん、ぉ！　んぅうッ、ぉ、っひ、はぁあッ、あぉぉ！」

彼の言うとおり、まさに今ほじくられているところが、彼女の一番いいところだった。何十回と交わってきたなかで、全ての性感帯は看破されている。

一突きされるたびオンナとして最高の悦びが襲い掛かり、視界がチラつく。たかが女子大生の身で、堪えられるわけもなかった。狂ったような、聞き苦しくも情熱的な声をあげよがるばかりだ。

「そらそら、喘いでばっかないで、腰振りなよ。やり方は教えてあげてるだろう？」

腰が打ち付けられるたび、車外まで聞こえそうな淫音がグチョグチョと鳴り響く。女の膣穴を責め立てつつも、おじさまはさらに欲深く要求してくる。

拒むメリーではない。雌穴を逞しい雄にほじくられる快楽は、彼女を深く屈服させる。抗うなど、とても考えられなかった。

「ぉほッ、そうそう。そうやって男を悦ばせてこそだよ、メリーちゃんみたいなのは」

交尾を繰り返し、中年の欲望を受け止めてはムチムチと成長した腰が、くねり始める。彼によって仕込まれた、彼好みのセックステクニックだ。結合部から響く淫音が、一段と強くなった。

「んっはぁッ、あぉッ、ぉッ、くひぃッ、アッ、んぅ、あはぁ、いぃッ、いぃッ！」

深くまでよがっては、セックスの快楽に酔う。抽送のたびシートが軋む。外から見れば、車体がぎしぎし揺れていることだろう。

いつバレてもおかしくない状況だが、まるで気にもしていなかった。目の前の肉交に、

すっかり夢中になっている。
「そぉらメリーちゃん、むぢゅるッ、んぢゅる、んぽぉッ」
「んむぅッ!?　んぐぷッ、おむぅ、ンッ、んふぅんっ……！」
中年男のたらこ唇が、ぷるんとした鮮やかなリップを貪る。当然、舌が入り込んでくる。熱烈極まるディープキスだ。
「んぢゅるッ、ぢゅむッ、れろッ、ぐちゅッ、ぬぢょっ」
「んぅう！　んっふ、んぢゅる、おむぅ、んふぅぅッ、んんぅううッ……！」
ぐっちょぐっちょと、唾液をやりとりしながら、舌を絡ませあう。ぬぢゅッぐぢょっと、粘膜を擦り合わせては、悦びを分かち合う。
下半身でも上半身でもつながり合い、体をぴたりと密着させる様は、さながら蛞蝓だ。とても、半オープンな空間で繰り広げてよいセックスではなかった。
次第に、ピストンがスピードを上げていく。体内を抉る肉棒が、最奥部を狙い始める。女としての悦びの器官、子宮口を、鉄のごとく硬くなった亀頭がゴスゴスと突き上げる。
「んぉおッ、ぉんっ、ぉッ、ぉッ、ぉんぅううッ……！」
そんな風にされては、正気でいられるわけもない。繋がった口腔の奥から、トドを連想させる聞き苦しい鳴き声を漏らしてよがる。きゅんっ、きゅんっと絡みつく膣肉が、どれ

ほどの悦びを覚えているか示している。

「フゥッ、フゥッ、フゥッ……！」

彼の呼吸は荒く激しい。メリーのような極上の美女をほじくって、興奮しているのだ。でっぷりした肉体ゆえ体力がないのもある。だが、それ以上の理由として、射精が近かった。

「んぅう、んむぅッ、れろッ、ぢゅぱッ……んふぅうッ……！」

己の内部でペニスが膨張し、今にも弾けそうなのを、メリーははっきりと感じていた。妊娠のリスクだとか膣外射精だとか、つまらないことを考える余裕は、今の彼女にない。搾り取る腰使いを繰り出し、膣内射精をねだる。

男もそのつもりだったらしい。腰を思い切り突きだしてくる。どちゅんッ、と体奥から肉の潰れる音が聞こえてきた。同時に、逞しき肉竿が思い切り弾けた。

「んふぅうッ――んぉッ、ぉ、んぅうううううッ――！」

男の会陰がキュッと収縮し、弾丸を放つ。マグマほども熱い濁液が、最奥部へ勢いよく注がれていく。雌を堕とし屈服させることに特化した濃厚精液が、子宮を満たしていく。

無数の精虫が鞭毛を蠢かし、己の痕跡を刻みつけていく。卵子と結びつくべく始まる、生誕のためのレースは、彼女を絶頂させるに十分すぎた。

背を反らしながら、ようやく訪れた絶頂の波に酔いしれる。結合部からぷしぃっと雌汁

が噴き、シートを濡らしていく。
白熱する意識の中で、己が彼のモノとして堕とされるのをはっきり感じた。これほどの快楽を植え付けられては、二度と逆らえるはずがなかった。
「むはぁ……ふぅ。やっぱりメリーちゃん相手だと、年柄にもない量が出るなぁ。いや、魔性の穴っていうのはこういうのを言うのかな……」
女子大生の子宮にたっぷりと種を植え、ぐりぐりと腰を押しつけ余韻まで楽しんだ後、男はようやく口を離して腰を引く。いまだアクメから降りられぬ肉穴は、離れたくないとばかりにペニスに吸い付く。亀頭が抜ける瞬間、ぢゅぽッと卑猥音が鳴った。
肉竿の先端と膣口の間を、ねっとりした糸が伝う。愛液と精液のミックスジュースだ。彼女が男の種を子宮で受け止めた、何よりの証拠でもあった。
「あはぁッ……はへ、あは、あぁ……」
激しいアクメを迎えたばかりのメリーは、すっかり惚けきっている。大股をおっ広げてヒクヒクと全身を痙攣させる様は、夏場に道端で潰れている蛙を連想させた。
「おっと。せっかく出したものが垂れてるじゃないか。いけない子だ」
「あはぁッ！　あっひ、あッ、駄目、駄目ェ～ッ」
達したばかりの肉穴に、指がねじ込まれる。とろぉお……と垂れつつあった白濁を押し

戻すように、ぐちょッ、ぐちょっとこね回してくる。
アクメしたての身体には、これでもずいぶんな刺激だ。腰を悶えさせながらよがり狂う。その姿は、彼を誘っているようでもあった。
「ククッ。チェックインの時間までは、まだだいぶあるからね。ちょっと道草を食っても何の問題もないだろうねぇ？」
ずっしりした肉体が、再び覆い被さる。男根は、今しがた射精したばかりだというにも関わらず、力強く天を衝いている。これほど良いオンナ、一度や二度の種付けでは足りぬといわんばかりだ。
「あはッ、あ、おじさま、アッ、駄目、今は、あぁッ、あはぁあッ！」
腰をくねらせ逃げようとする様は、むしろ誘ってすら見える。案の定、あっさり女穴をほじくられながら、彼女は二度目のカーセックスに意識を蕩かすのだった。